

二〇二三年度

二月三日午後入試（第五回）

国語（45分）

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、5-1 から 5-13 まであります。

一 次のⅠ・Ⅱ・Ⅲの文章を読んで、後の問いに答えなさい（字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。）

Ⅰ

せっかくイタリアに来たので、次はイタリアを舞台にした作品を紹介しましょう。

これは『ローマへの道』というタイトルの作品です。この絵の二人はバレエダンサーを目指しています【1】。手前の少年がマリオという名前の主人公です。

私は日本の戦後の貧しい時代に育ったので、ヨーロッパの豊かな文化に対する強い憧れがあります。だから少年は美少年です。

マリオはお母さんが死んだと思って育ちますが、実は生きていたとわかります。母親はローマにいて、自分はパリに住んでいるのですが、ローマまで会いに行きます。ここにローマのテルミニ駅が出てきます【2】。*アッピア街道をバスで走り、母親に会いに行くのです。

マリオはローマで生まれて四歳まで住んでいましたが、まったくその頃の記憶がありません。母親は父親を殺して刑務所に入っていました。今は刑務所から出て働いています。マリオが訪ねても、「あたしには子供はいないんだよ。」といって、母親だとは言いません【3】。

二人の間で言い争いになりますけれど、マリオは母親に「帰れっていうのか また捨てるのか!」といっ
てしがみつきます【4】。母親もマリオを抱くと、子供の頃のことを思い出します。母親はマリオをかばっ
たはずみに、夫を殺してしまっただけです。マリオへの愛情が、そうさせたのでした。眠っていたその時の記
憶が、マリオに蘇ります。「昔、お前はとても小さかった。」と、母親は言います。やっとここでマリオは「マ
マ」と呼ぶことができます【5】。

それまではマリオにとって、ローマの町はまったく知らない町でした。けれど急に、ローマが愛しいもの
になりました。ローマの家の屋根や窓の一つひとつが、今はとても懐かしいのです。そしてイメージの中で、
マリオは空の上からローマの町にキスをして、ローマの町と和解します【6】。これが『ローマへの道』の
あらすじです。



1=ア



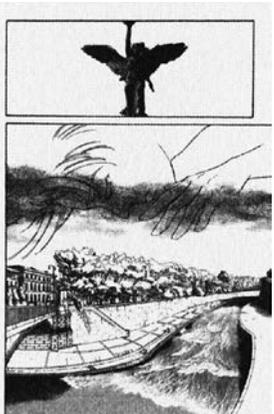
イ



ウ



エ



オ



カ

次に『イグアナの娘』という作品についてです。

これは最初の絵ですが、手前にいるのがイグアナです。鏡の向こうにいるのが女の子です。これは同一人物です。本当は女の子なのですが、自分はイグアナだと思い込んでいます。

主人公が生まれたときのシーンです。お母さんは自分がイグアナを生んでしまったと思って、びっくり仰天しています。お母さんの目には主人公がイグアナに見えるのです。で、育てますが、娘がイグアナなので愛することができません。次の子供が生まれたらかわいい女の子でした。お父さんは長女を抱いていません。お父さんには普通の娘に見えるのですね。

姉妹は成長します。でもお母さんはどうしてもイグアナの長女が可愛いとは思えなくて、何かにつけ「あなたはブサイク」だとか「あんたは声が悪い」とか、何をやっても文句を言います。それで、お母さんと喧嘩をします。お母さんは妹ばかりかわいがって私のことをいつも叱っている。で、あたしがイグアナだからきらいなんでしょうって言うんですけど、お母さんは二度と自分のことをイグアナと言ってはいけません。とものすごく怒ります。

それで彼女は、「たぶん私はイグアナがたくさんいるガラパゴス諸島で生まれるはずだったんだけど、間違って人間のところに生まれたんだな。」と思います。

思春期になりまして、ちよつとのんびりした男の人と出会います。そして結婚して子供が生まれます。ところが人間の子供が生まれたので、彼女はイグアナの自分に人間の子供が可愛いと思つて育てられるのだからかと悩みます。

ところがそこに、お母さんが死んだと知らせがきます。お母さんは心臓発作で急に死んでしまいました。布団の上に寝て、顔に白い布がかかっています。親戚のおばさんが顔を見てあげなさいというので、布を外してみます。すると、お母さんもイグアナでした。彼女は本当に驚きます。

そして、夢を見ます。ガラパゴス諸島に行った夢です。

そこで彼女は女王様のようなイグアナを見つめます。このイグアナは海に入つていって、海の魔法使いに自分を人間にしてくれと頼むのです。人魚姫が王子様を好きになつて人間になりたいと言つたお話があります。ちよつどそれと同じようにイグアナが人間になりたいと言うんですね。

すると魔法使いは「いいとも、人間にしてあげるよ。だけどね、絶対に自分がイグアナだとばれちゃいけないよ。」と言います。で、お母さんは、イグアナだったことを全部忘れて、人間になつて幸せに暮らすわと約束します。

ところが結婚したら生まれた子供がイグアナだったのです。お母さんは自分がイグアナだったことを忘れていたので本当にびっくりしますし、子供を愛することができません。人間になつたイグアナの話は、死んだお母さんの枕元で彼女が見た夢なのです。③ 夢だけど、たぶんそういう理由でお母さんは私を嫌つてたんだらうなと思います。

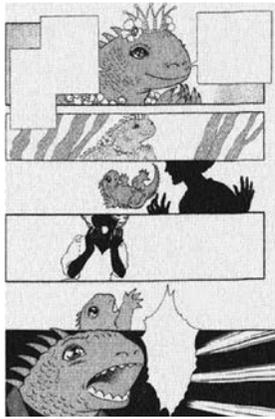
それから彼女は、お母さんを許せないけれど、お母さんを理解しました。そして自分の生んだ子供をちゃんとかわいがれるようになりました。

そういう話です。

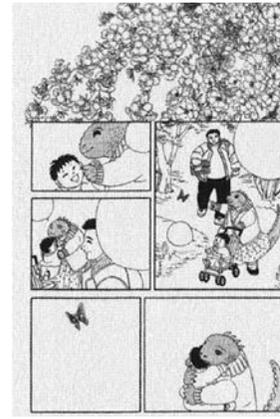
(萩尾望都『私の少女マンガ講義』より)

※(注) アツピア街道——ローマから南東へ向かう古い街道。

ガラパゴス諸島——南米、エクアドルの西方約千キロメートルの太平洋上にある火山群島。



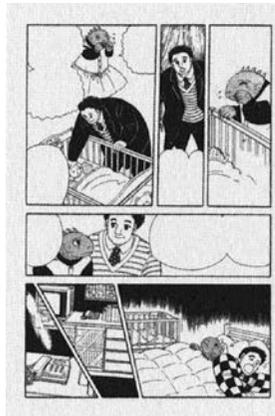
ケ



カ



ウ



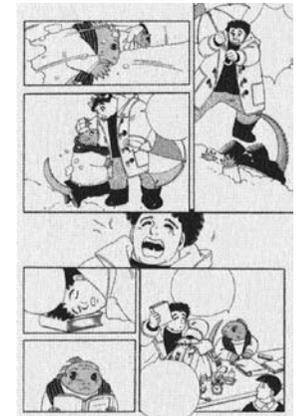
コ



キ



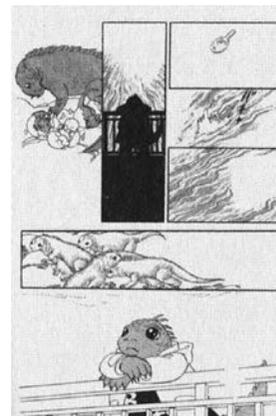
ク



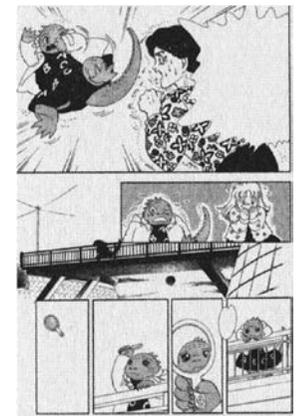
カ



ケ



コ



ク

母娘関係を分析するにあたり、私たち日本人にとって圧倒的に有利なことが、少なくともひとつあります。それは、私たちが「少女まんが」というジャンルを知っている、ということですが。しかし奇妙なことに、母娘関係を扱った日本人研究者の本を読んでも、少女まんがを素材とした分析はほとんど眼にしたことがありません。これはきわめて残念なことです。およそあらゆる表現ジャンルの中で、「母殺し」問題というテーマを、その発生当初から最も切実な主題としてきたのが、少女まんがにほかならないからです。たとえば大塚英志氏は、次のように述べています。

少女まんがを論じる上で一度きちんと批評の俎上に乗せなくてはならないのは、少女まんがが母性をいかなる形で主題化してきたのかという問題である。そのことを抜きにして少女まんがの歴史は語れないし、その可能性と不可能性は特定できないように思う。

（「母性」との和解をさぐる」アエラムック『コミック学のみかた』朝日新聞社、一九九七年）

この大塚氏の指摘は、この文章の発表当時隆盛をきわめていた、少女まんが家たちによる出産コミックへの批判を背景にしています。大塚氏は、「かつて少女まんがというジャンルが澱のように自らの内部に抱え、その呪縛に苦しんでいたかのように見えた主題」は、決して精算されていないと考えています。しかし出産コミックの書き手たちは、そうした主題があたかも精算されたかのように、あつけらかんと自らの母性を肯定しているというのです。

しかし大塚氏は一方で、少女まんがという形式は作者の自意識をひたすら肯定的にしか描きえないという「致命的な欠点」を持つ、とも指摘します。だとすれば、母性の肯定も母性への問いも、肯定されるべきさまざまな自意識の共同体を形成するだけのことであり、そのようなジャンルはもはや「語るに値しない」とまで大塚氏は述べます。

大塚氏の論調はきわめて真摯なものであり、この論文の激しいトーンには、大塚氏自身が少女まんがというジャンルに個人的な「母性への問い」の答えを求めていたのではないかと、という疑いすら抱かせるものです。それゆえに答えてくれると信じていたジャンルに裏切られたという怒りが文章の基調をなしているようにも読めます。

この文章で大塚氏は、萩尾望都氏の『イグアナの娘』（小学館、一九九四年）という作品を取り上げます。それは名作の誉れ高いこの作品をほめたたえるためではありません。むしろこの作品については「彼女の作品歴に照らしあわせればテーマ的には後退している。」と断定します。かわつて大塚氏が高く評価するのは『マージナル』（小学館、一九八六年）というSF作品であり、「フェミニズム少女まんが」です。この作品の解説において、大塚氏は再び重要な指摘をしています。

24年組の少女まんがの最大の特徴は身体と内面の発見である。それは一言で言ってしまうれば自らの性的身体とそれを見いだす自意識の発見である。性的身体を性的快楽のための身体と位置づけ直すには彼女たちの自意識があまりに大きすぎ、それ故に性的身体が発見はそのまま産む性としての自らの身体性の受容というより大きな命題を背負い込むことになる。

24年組の初期作品において、出産や母親の関係が未分化のまま主題化されているのはそれ故でもある。

「二四年組」とは、一九七〇年代に少女まんがのテーマや表現技法に革命的な変化をもたらした女性漫画家たちを指す言葉です。生年が昭和二四年前後に集中していたためこのように名付けられました。代表的な作家に竹宮恵子、大島弓子、山岸涼子らがいます。もちろん萩尾望都もその一人です。

これに続く『マージナル』の大塚氏独特の解釈も興味深いのですが、それは本書の主題からすればかなり方向性の異なる議論であると考えられるため、ここでは深入りしません。

〔中略〕

本書のテーマに即していえば、『マージナル』という作品の抽象性よりも、『イグアナの娘』の直接性のほうが、さしあたり価値を持っています。それゆえまずはこの作品について検討を試みましょう。

大塚氏の指摘にもかかわらず、私はこの作品がたいへんな傑作であることは疑いえないように思います。それは母娘関係における「身体」の意味を主題化するうえで、ちょうど第四章で後述する楳図かずお氏の『洗礼』（小学館、一九七六年）という作品と好対照をなしています。

以下にストーリーを結末まで紹介します。ネタバレで価値が減る作品ではありませんが、未読の方はご注意ください。

本作は母に愛されない娘が主人公です。母親は自分の生んだ娘がどうしてもイグアナに見えてしまったため、愛することができません。人間に見える次女は愛することができるのに、イグアナそっくりの長女はうとましい。長女もまた、母親に愛されず、妹に比べて「みにくい」といわれ続けたため、実際には美人で優等生であるにもかかわらず、劣等感を抱き続けます。やがて長女は結婚し女の子を生みますが、娘は母親に似ているために、愛することができません。そんなある日のこと、母親が脳溢血で亡くなったという報せが届きます。駆け付けた長女が目撃した母の死に顔は、イグアナの顔をしていました。長女は激しいショックを受けますが、ここに至ってはじめて母親の苦しみを理解し、母親と「和解」を遂げようとしています。

大塚氏は萩尾望都という作家がまだ母性と和解していないことに「安堵」し、彼女が「子という他者への違和」を表明している点を評価します。それは実母を嫌悪しつつ自分が生んだ子供への肯定を自己肯定と重ねてしまう内田春菊のような作家とは対照的である、とされます。

大塚氏がおそらくは本作をそれなりに評価しつつも、『マージナル』との比較において「後退している」と批判するのは、ひとつには主題の直接性と、結末における「和解」ゆえでしょう。ハッピーエンドだからというわけではありません。本作の結末は、あたかも「母殺し⇨和解」と読むことも可能です。大塚氏の違和感は、かくも安易に成立してしまった母殺しに向けられたものであるように、私には思われるのです。

その仮定のうえで、あえて問うのですが、本作の結末は、果たして「母殺し⇨和解」なのでしょうか。むしろ私には、母殺しの可能性が強く示唆された終わりのように思えます。果たして主人公は、母に

そっくりの自分の娘の顔を、人間の顔として見続けることができるでしょうか。母の正体⇨イグアナを知り、母の苦悩を理解したところで、「母性」の呪縛が解けるわけではありません。たとえ母という個人は「救す⇨殺す」ことが可能だとしても、自らの内面にも根を下ろしている「母性の呪縛」は、この程度の洞察では救われない可能性もあるのです。

（斎藤環『母は娘の人生を支配する』より）

※（注） ジャンル 分野・種別

組上に乗せなくてはならない⇨「組上に乗せる」は、話題として取り上げ、あれこれ論じるという意味。

隆盛 勢いがさかんなこと。

澱おろ……………液体の底に沈んだかす。ここはたとえて用いられている。

呪縛じまばく……………心理的に他人の心の自由を奪うこと。

真摯しんし……………まじめでひたむきなこと。

うとましい……………いやで避けたい気持ち。

脳溢血のういつけつで亡くなった……………正しくは I があるように「心臓発作」が死因。

示唆しそく……………それとなくヒントを教えること。

III

女性は、女性として生まれただけで、「母性本能」なるものを備えていて、自分の子を持ちたがり、子のために自分のすべてを捧げるものであるとの信仰がまかり通っている。

こうした信仰が共有されている社会の中では、母性なるものを実感できない女性は、あたかも自分に大事なものが欠けているように感じて、それを隠そうとしたり、自己嫌悪に陥ったりせざるを得ない。まして、現に乳幼児の世話に追われている母親が「我が子を愛せない」となれば、この母親の罪の意識、焦りと当惑の感覚は極限まで高まることになる。

「子どもの虐待——〇番」に連絡してくる母親たちのかなりの部分は、こうしたお母さんたちである。

実際は、すべての母親が、いつも「子どもが可愛くてたまらない」わけではないし、育児だけに身を捧げて充実を感じるわけではない。子どもがいるというだけで、育児だけに没頭し、自分の感情も欲求も忘れてしまう母親がいるとすれば、それは人ではなく「母親ロボット」である。人間はロボットではない。ロボットのように機能的ではなくて、まわり道も錯誤もあるが、そういうところに意味があればこそ、子育てはロボットに任せられないのである。

母親は自分への自己肯定感を注ぎ込むことによって、「可愛い子」を持つ。健康な自己肯定感に恵まれていることは、その母親にとって幸せだし、子どもにとっても有り難いことにはちがいないが、そうした人であればあるほど、本来の自分に対する愛着の情も深いから、いずれ、子どもを邪魔に思うときも出てくる。まして、自己否定的な人が母親になれば、赤ん坊は憎しみや恨みの対象にさえなる。たいていの（普通の）母親は、それほど自己肯定的でもないし、自己否定的でもないから、ときどき子どもが可愛く見え、ときどき憎たらしく思えるものである。

子どもが邪魔だなど思うのも、憎らしいと思うのも、「自然な感情」である。確かに、母親に邪魔に思われたり、怒りや恨みの感情を向けられたりすることは赤ん坊にとつての危機だが、母親たちは自分の役割をわきまえているから、子育てという仕事に手抜きをするわけではない。

それに、⑧から「憎たらしい」と思うときでも、「可愛くてたまらない」と思ったときの自分の感情を思い出せるのが普通の母親だから、子育てはとどこおりなく行なわれるものである。

もう一度、繰り返して述べたい。育児に伴って母親は子どもに陰性感情（怒り、憎しみ、嫌悪感）を向けることがある。そしてそれは「当たり前」のことである。

それにもかかわらず、母親から子どもへの陰性感情は、今までほとんど語られてこなかった。それは語ることを禁じられてきたからである。禁じてきたのは、家族の中の権力の担い手であり、家族イデオロギーの唱導者であり、社会という権力構造の支え手である者、つまり成人の男たちである。

社会の掟の中でもっとも原初的なものは、言葉を介することもなく文化の中に浸透し、そこに生きる人々の心の内面に入り込む。「母たる者は子を愛さなければならない」という掟は、この種の掟であり、女性た

ちを心の内面から支配している。支配された女性たちは「ならない」を「する」と読み換え、「母たる者は子を愛する」と考えるようになり、こうして、それは女性の「本能」とされてしまう。ついには女性たち自身も、この「本能」を誇らしく思うところまで、この禁止（掟）^⑨は完全な成功に達する。

こんな本能論がまかり通っている社会の中で、「母親になるなんてつまらない、くだらない、いやだ。」とか「子どもなんて可愛くない、憎らしい、おぞましい。」と明確に語るにはかなりの勇気がいる。だから女性たちは、こんなことを口にすることなく黙って男を遠ざけ、黙って流産し、黙って新生児を殺し、黙って子どもたちを虐待してきた。そしてそれらに罪の意識を感じ、心の救いを求め、これまた「父なる神」の掟からなる宗教に依存したりした。

社会は一人で生きようとする女たちに意地悪し、いじめ、子を産まない（産めない）女たちを蔑んできたが、罪を感じてしまっている女性たちは、^⑩それをも当然の報いと受け止め続けてきた。

女性たちが、「子どもをつくらない理由」や「マザリング（母親業）という苦行」についてオズオズとながら発言するようになったのは、ほんの少し前になってからのことである。

（斎藤学『「家族」という名の孤独』より）

※（注） 錯誤——あやまり。

家族イデオロギーの唱導者——「家族イデオロギー」は、社会の中で「家族」とはこのようなものであると定義する物の考え方の全体。「唱導者」は、この考えを説く指導者。

おぞましい——ぞっとするほどいやな感じがするさま。

問一 本文にある【1】～【6】は筆者の説明にあうように配置されたまんがの場面を示す番号です。例にならって記号を入れると、本文にある【2】～【6】にはそれぞれの画像があたりまいますか。後の画像に付いているイゝカの記号で答えなさい（ただし、順番は入れかえてあり、まんがの中の言葉は削除されています。）。

例【1】Ⅱア

問二 ——線①「ローマの町と和解します」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「和解」する前、「ローマの町」はマリオにとって、どのような「町」だと説明されていますか。
【I】の文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

2 「ローマの町」とありますが、この言葉にはもう一つのもが重ね合わされています。それは何だと考えられますか。
【I】の文中にある言葉をぬき出して答えなさい。

問三 ——線②「親戚のおばさんが、彼女は本当に驚きます。」とありますが、この場面は後にあるどの画像にあてはまりますか。ア～コの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい（ただし、順番は入れかえてあり、まんがの中の言葉は削除されています。）。

問四 ——線③「夢だけど、たぶんそういう理由でお母さんは私を嫌ってたんだろうなと思います。」とありますが、「そういう理由」とはどのような「理由」ですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア お母さんはイグアナであることを隠していたが、生まれた長女がイグアナに見えたので、もはやイグアナの家族である事実を隠すことができなくなったから。

イ お母さんは自分がイグアナであることを家族に知らせていたが、長女もイグアナであることにおどろき、家族を愛することができなくなったから。

ウ お母さんはイグアナだったことをすっかり忘れて人間として暮らしていたが、生まれた長女がイグアナに見えたので、愛することができなかったから。

エ お母さんはイグアナであることを隠していたが、長女のせいでイグアナであることが世間の人に知られてしまったために、長女をうらんでいたから。

問五 『イグアナの娘』の主人公（長女）の母に対する思いは、『ローマへの道』のマリオの母に対する思いとは、決定的に異なる点があります。両者の異なる点を解答らんの「という点が異なる。」につながるように、【I】の文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問六 — 線④ 「答えてくれると信じていたジャンルに裏切られたという怒り」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「答えてくれると信じていたジャンルに裏切られたという怒り」とありますが、これはどのようなことを言おうとしているのですか。次の文の a・b にあてはまる言葉を、それぞれ II の文中からぬき出して答えなさい。

大塚氏がここで言っている「ジャンル」とは、 a b のことであり、それが の問題について、はっきりと主題化されてこなかったことを批判して言っている。

2 ここでいう「ジャンル」について、大塚氏は「致命的な欠点」があると語っています。「致命的な欠点」とはどのようなことですか。解答らん「こと。」につながるように、文中から二十文字以上二十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問七 — 線⑤ 「果たして主人公は、母にそっくりの自分の娘の顔を、人間の顔として見続けることができるでしょうか。」とありますが、「主人公」は「自分の娘」をどのように思っていると考えられますか。それがわかる部分を II の文中から二十文字以上二十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

問八 — 線⑥ 「まかり通っている」とありますが、「まかり通る」が適切に用いられていない一文を次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 一部の人たちのわがままがまかり通っているために話し合いがまとまらない。
- イ そんな勝手な理由がまかり通るぐらいならもう話し合いはやめたほうがいい。
- ウ どんなに不正がまかり通っていても正しさを貫くことが人間としての生き方だ。
- エ 正しさがまかり通っている状況はクラスにとっても先生にとってもありがたい。

問九 — 線⑦ 「母親ロボット」とありますが、「母親ロボット」とはどのような「母親」をたとえているのですか。 III の文中から三十五字以上四十字以内でぬき出し、その初めと終わりの六字を答えなさい。

問十 — 線⑧ 「しんから『憎たらしい』と思うときでも、『可愛くてたまらない』と思ったときの自分の感情を思い出せるのが普通の母親」とありますが、「憎たらしい」と「可愛くてたまらない」という異なる二つの「感情」を「普通の母親」はもっていると筆者は言います。この「普通の母親」の二つの「感情」について、ほぼ同じ内容の説明をしている一文を文中からぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問十一 ——— 線⑨「この禁止（おきて）は完全な成功に達する。」とありますが、「完全な成功に達する」とは、どのようなことを言うのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 女性たちが子を愛するのは本能とみなされ、本能と感ずることで女性たちは自らを誇らしく思うようになること。

イ 女性たちが子を愛するのは家族に囲まれていて初めて実感できるのであり、女性の多くは結婚しても父親の愛に支配されていること。

ウ 女性たちが子を愛するのは男たちがそうさせているのであり、女性たちは子を愛することがいやとは言えないような状態になること。

エ 女性たちが子を愛するのは当然の決まりであり、男たちはそれを利用して女性たちの心を支配するようになること。

問十二 ——— 線⑩「それ」は何を指しますか。解答らん「こと。」につながるように、Ⅲの文中から四十五字以上五十字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問十三 Ⅲの文章の内容として適当でないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 母性というものを実感できない女性はいるので、そういう女性はまるで自分に大事なものが欠けているように感じて自己嫌悪けんおにおちいることがある。

イ すべての母親はいつも子どもがかわいくてたまらないわけではなく、また育児だけに没頭ぼつとうし充実した気持ちになるわけでもない。

ウ 子どもへの怒りいかや憎しみにくの思いを語ることを禁じてきたのは、社会を構成する成人の男性よりもむしろ女性の方が積極的であった。

エ 女性が子どもをつくらない理由やマザリング（母親業）について発言するようになったのは、それほど昔のことではない。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① まじめでジユウジュンな性格。
- ② 知識をキュウシユウする。
- ③ 電車のウンチンをはらう。
- ④ さまざまな無駄をハブく。
- ⑤ 生徒会のフク会長に立候補する。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 皮革製品を販売する。
- ② 友人の安否を気づかう。
- ③ 体力が回復するよう養生する。
- ④ 昨年大病をわずらった。

問三 次の①～④の漢字について、〈例〉を参考にして、1 漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。
2 後にあげた漢字と組み合わせ、それぞれ熟語を完成させなさい。

〈例〉作る 1 つく(る) 2 操作

- ① 反らす
- ② 効く
- ③ 敬う
- ④ 営む

成・意・備・直・有・応・優・異・操

問四 次の①・②の各文の——線部の言葉の意味として最も適当なものを、後のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 先生はおもむろに話しはじめた。
ア ゆっくりと イ きゆうに ウ ふいに エ なんとなく
- ② 父はそそくさと家をあとにした。
ア だまって イ せかせかと ウ おちついて エ つれだって

問五 次の①・②の各文の——線部のア～エの中から、使い方が異なるものをそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① ア 不思議な夢を見た。

イ 静かな教室に入る。

ウ さわぐなと言われた。

エ さわやかな風を感じる。

② ア 桜の花がうつくしかった。

イ 説明を聞いてよくわかった。

ウ 先生の話はおもしろかった。

エ きこの学芸会はたのしかった。

